

盤字文の鯨

Le cadran de la baleine

鶴夜山入

堂鶴狐

この詩集は作曲家・白葉くじ様による
「ゆる作曲」シリーズのうち、
白葉様のオリジナルである楽曲に
詩を書かせていただいたものです。

なお、詩は入山夜鶴が抱いたイメージであり、
白葉様の御意向とは無関係です。

目次

落陽の唄	八頁
暁の鳥	九頁
ウンディーネの子どもたち	十頁
教室	十三頁
夜想	十四頁
覚えのない店	十五頁
いなか	十六頁
蟹の行進	十七頁
侵入思考	十八頁
ノスタルジー	十九頁

鏡面に咲く	一一一頁
行きずり	一二二頁
蜜の戯れ	一二十四頁
夜來たる	一十五頁
ちいさな祈り	一十七頁
翠映	一十八頁
タルの回廊	三十頁
あとがき	三十一頁

鯨の文字盤

入山夜鶴

狐鶴堂

落陽の唄

雨上がりと似た西からの風
あたたかく肩を撫でながら
哀しい青を落とすから
目をそらした。

丘の下にはレンガと夕日
覆いかぶさる青のなか
ランプが息を吹き返す
熱くぼやけて。

原曲「夕の丘」

暁の鳥

世界の深いところから

朝焼け冷たい空へ

羽ばたきの音は祝い

祈りの欠片が降つてくる

姿なきものが

昇る

ウンディーネの子どもたち

春の庭に 午後の庭に

花の庭にほろほろり

蝶の羽を 鳥の足を

猫の髭をほろほろり

おどけながら 笑いながら

逃げてゆくよほろほろり

赤いバラと白いバラの

裏手をほらほろほろり

ひそひそ声 くすぐらせて

光の粒ほろほろり

朝うまれも雨うまれも
緑のふちはろほろり

踊りはじめ 歌いはじめ
盛り上がりつてほろほろり
つつきあつて つかみあつて
けんかしてはほろほろり

とつぶりとまん丸に
集まつてぱたぱたり
木の幹が泣くように
つたつてゆくするするり

ウンディーネの子どもたちの
昼下がり

原曲
「水滴」

教室

テンポを揃えて 長さを揃えて
ぜんまい仕掛けの小指がアリアを歌う

親鳥を真似る小鳥のように
悩ましく綴る手紙のように

もうじき一息つけるまで

時計をちらちら見やりつつ
格子の窓に吹かせるエチュード

夜想

銀の月が出た 針葉樹の森の上
川の精が居るならば 鱗うろこまでが
光るほどに照つた オーガンジーの雲の下
女神さえもバルコニーで祈り涙するほどに
夜風もやさしく絹糸の谷を下り
森を通り 街の子どもの枕元へ
子守唄をかける

覚えのない店

通りの石畳が小さくなつてきいたら

それはきっとあなたに 願いがある証

覚えのない店の窓を覗いたなら

見えてくる、見えてくる

蒸留するフラスコに ひと雫の星を

鍋をかける炎には ひと昔の息吹を

窓辺の黒猫と目が合つたなら

扉を引け、願い人よ

いなか

なかなか落ちない夕日を
太った猫が日陰で睨む
かなかな消えない残響を
よその番犬が垣根で惜しむ
ガラスの瓶も好きなアイスも
晴れた空の色だつた記憶と
引き換えに何が貰えるの
教科書の山も 周りの大人も
怪談話も 雑誌の付録も
線香花火も キリギリスたちも
蚊取りの煙も ならんだお墓も
まだあげたいほどあるんだ

蟹の行進

砂にまみれた小さな蟹が

川辺の波に抗つていく

「まじまじ」と脚を水車のように

はためかせて行進する

今日は葦をえ頭を抱えていると

薄も悲鳴をあげて いるというに

勇ましかな蟹よ

浮かされ降ろされ

鉄ひとつ鳴らされ

消えて いつた蟹よ

侵入思考

日暮れも間近な森林の
道標から逸れたとしたら
私は人ではなくなつた
ような

そんな気がしてしまっただろう

鳥の声々

木々は夕闇を蔽い

水源の憐れみ

濃さを増す土の匂い

記憶 存在 事実 すべてが溶け

私は人ではなくなつて

しまうだろう

ノスタルジー

天井扇が夕日の中で

アツチエレランドするよう
に
どこかの夫人のエプロンが
オーブンの煙と踊っている

無垢な子どもが幾人と
大きな犬と小さな猫と
鞄を下げた家の主人と
金に輝く庭のハーブと

天井扇が夕日の中で

リタルダンドするさなか

今日もどこかで
ノタルジーが吹く

原曲「団欒ワルツ」

鏡面に咲く

天地すべてが水縹に染み
染む中間に睡蓮は咲く
鏡の底には何も匂わず
撫陀多ひとり感じられない

この冷水に浮いてゐたい
白い太陽にかざす手も
いつか指の先から
開花するよう

行きすり

変わらぬ朝が光るとき

冬の鋭利、夏の彩色の

同じ明るい青が浮くとき

その青に家々の壁の

白や生成りなどが浮くとき

下る坂は不思議をまとう

見上げた坂は夜明けが匂い

どこかで時間を止めた太陽

どこかに連れて行かれる月

風 鳥 猫 犬 草 花

自分だけが模型のようだ
人の居ない軒並みに立つ
歩くことを今知つたように
春の寂莫、秋の衰弱を
小さな吸気に感じるとき
やはり、変わらぬ朝が光つてゐる

蜜の戯れ

蜜が差し込む、まるみに差し込む

林檎の皮が気泡をたてる

水音淡き午後のゆらぎに。

蜜が冷え込む、まるみを翳らす

林檎の皮は紫がかる

まだ暖かき午後の窓辺に。

夜來たる

最後の光も行つてしまつた

橋の上には車が増えた

河の水は

寂しい悲しい鈍色になつた

向こうの岸の黒い山では

赤くなりかけた月もひとりだ

なぐさめてくれる茶の一口も

ひとつパンも持たずに

涼しさを増す月食の岸

紅茶とパンと小さな蛙と

田舎の静けさ
これが夜である

原曲「川辺の夕べ」

ちいさな祈り

祈ります

たとえば赤子とすれ違うとき

西日や月の美しいとき

唯一の神など私になくとも

祈りのようなにかをします

翠映

玉砂利は濡れ

若松からは零れ

軒先は滴り

古木は湿る

み空の色の眠たげなるは
梅の実の音にも驚かず

半刻のゆくをひたすらに
ひたすらに降り続くかな

時報の鐘のみ遠くにばやけ

雨の翠は

かくもまばゆし
翠ばかりは……

原曲 「雨の降る庭」

タイルの回廊

マゼンタの唐草に白飛び散り
タイルの回廊は奥へ延び
黄色な花にも白飛び散り
タイルの壁面は縦へ伸び

朝日の琥珀に呼応して

タイルの表情は慈愛を帶び

マゼンタの唐草に白飛び散り

私の足は左右が混ざり

黄色な花にも白飛び散り

私の眼は脳を泳ぎ

朝日の琥珀に呼応して

タルの表情は慈愛を帶び

朝の青き翳りに上下して

モザイクタルの白は劣化し

粒子のごとく佇む

あとがき

この人こそラヴェルの弟子だ。

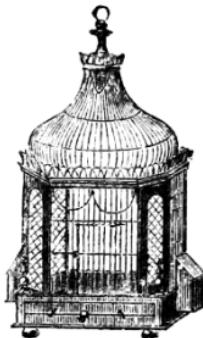
初めて白葉さんの作品を聴いたとき、そう思つたのを覚えてい。作品の雰囲気を何と書き表そとか未だに悩んでいるが、恐らく「日常の幻想を捉えたような」とか「幻想こそが日常であるような」とか、そういう表現になりそうだ。もとから世界が絵本の一页であつたかのような、不思議な気持ちになる。

彼の作品が日常の背景になつた頃、私はラヴェルやピアソラの作品を基に詩を書いていた。同時に白葉さんの作品で書いてみたいとも思つていた。ただそこには懸念があった。古い楽曲で書く詩は「故人に口なし」という気持ちが匙一杯分ほど入つている。作曲者が明言していない部分の解釈が、ある程度自由でも問題は無いということだ。しかし相手が御存命の場合、どうであろうか。私の勝手気ままなる解釈の塊を読んで「ああ、そういう意図の楽曲だったのか」と勘違いする人がいたら大惨事である。当時うじうじと詩を書きながら、初めて感じるじれつたさに戸惑つていた。

しかしどこの神様が引き合わせてくださったのか、なんとある日、白葉さんのほうから
DMが来た。拙作「命の紐」に感想を頂いた。あの時の指の震えを今も思い出せる。
それからしばらく経つた日だった。せつかく向こうからお声がけ頂いたので、この縁を
持つておきたいと勢いづいて、とうとう私は詩を書かせてくださいと頼んでしまった。
これは、そんな経緯を持つ詩集の一冊目である。

令和七年十月

入山夜鶴



著者は本書が無償で読まれることを望んでいますが、
著作権の放棄はしていません。
たとえ一節であっても
商用利用および著者名の併記が無い転載を
堅く禁じます。

鯨の文字盤

入山夜鶴

発行日　：2025年10月20日

発行者　：入山夜鶴

サークル：狐鶴堂

連絡先　：yaits-bngk@outlook.jp